



優秀賞／銀の星賞

熊本県 県立熊本高等学校 二年 河原 奈里

『夕焼けの精』

僕はその日、学校が終わると、まっすぐに学校の裏手にある川原へ行った。この川原は、周りを土手に囲まれていて、その土手を、よくおじいさんが犬の散歩をしていたり、近所の中学校の運動部の部員たちが、規則正しく掛け声を上げながら走ったりしている。川原、といっても、ここには背の低い草がたくさん生えていて、ちょっとした原っぱのようになっていて。休みの日には、よく子供たちが草スキーなんかをして遊んでいる。

もつとも、今日は平日だし、夕方ということもあって、川原には人っ子一人いなかった。僕は、川に架かっている橋の下まで歩いて行って、そのちょうど階段のようになっているところに腰掛けた。ここは、僕が一番お気に入りの場所だ。一人で、色んな考え事をするのにはぴったりの場所だから。

その日は、夕焼けがきれいだった。僕の右手、ちょうど川の下流の方に、燃えるようなオレンジ色の太陽が沈んでいく。太陽は、圧倒的な存在感で、川も、町並みも、全てを自分の色に染め上げている。僕は、明日は晴れかな、とぼんやり考えながら、夕陽を眺めていた。

「ふうん。今日の夕陽はすごいね」

急に背後から声がして、僕は驚いて振り返った。

「夕陽なら、いつも見てるけど。こんなにきれいなのは、久しぶりだな」

そこにいたのは、小学校三年生くらいの男の子だった。サイズの大きいだぼっとした感じのシャツと半ズボンから、細長い手足が伸びている。髪は、夕陽からそのまま抜け出てきたような、鮮やかなオレンジ色。ポニーテ

ールにしていたが、ほどくと腰まではありそうな長さをしていた。髪と同じ色をした大きな瞳を、夕陽から僕に移して、男の子はにつこり笑った。

「はじめまして、おにいちゃん」

「えっ、きみ、誰？」

「ぼく？ ぼくはねえ……妖精、かな？ お兄ちゃんたちの言葉で言うなら」

男の子はそう言って、またにつこりとほほえ微笑む。

「妖精って……」

「そう。時間の中を移動できる、妖精。時間を操作することが、ぼくのチカラ」

「時間を…操作する？」

「うん。ずっと、お兄ちゃんに会いたいと思ってたんだ」

「僕に？ どうして？」

僕がそう聞くと、男の子は僕の正面に回ってきて、すとん、としゃがみ込み、僕の顔を覗き込んだ。

「お兄ちゃんには、やり直したい過去があるんじゃないかな？」

どくん。

男の子の言葉に、思いがけず心臓が高鳴った。

「…どうして」

「匂いがしたんだ。そういう、匂いがね。ぼくは、鼻が利くんだ」

男の子は、くんくんと鼻を動かして得意そうに笑った。そして、すっと立ち上がり、まっすぐに僕を見る。

「戻してあげる」

「……え？」

「言ったでしょ？ 時間を操作するのが、ぼくのチカラ。だから、そのチカラを使って、お兄ちゃんのやり直したい過去に戻って、そこから人生を、やり直させてあげる」

「やり直すって…そんなことが、可能なの？」

「うん。ただし、一人一回まで。人生に一度きり。これは、全ての人に与えられた権利なんだ。他の人も、結構やり直してるよ？　ただ、忘れてるけどね」

「忘れてる？」

「過去をやり直した人は、やり直したことを忘れる。本当のことを言うと、ぼくが記憶を消してるんだけどね。そういう風に、決まってるんだ。お兄ちゃんも、過去をやり直したら、それに関する記憶だけ、消させてもらうよ」  
男の子はそこまで話すと、さっと僕に右手を差し出した。

「やり直すのも、しないのも、お兄ちゃんの自由だよ。やり直すなら、手伝ってあげる」

僕は黙って、差し出された手を見つめた。やり直したい、過去。そんなものが、あるとしたら。

僕の脳裏に、一年前の夏のことが、鮮やかによみがえってくる。まるで、昨日のこのように。

一年前、中学三年生の夏。サッカー部に入っていた僕は、間近に迫った市のサッカー大会に向けて、毎日練習に励んでいた。優勝校には、県大会の出場権が与えられる。僕たちの中学校は、周辺でも強豪校として知られていて、有力な優勝候補だった。

その当時、僕は同級生で親友の雄二とレギュラー争いをしていて。今までの試合でも、僕たちは代わりばんこにレギュラーを取り合っていて、実力はほとんど変わらなかった。特に、今度の大会は中学校最後の大会ということもあって、僕たちはいつもにも増して練習に打ち込んだ。絶対に、レギュラーになって優勝したかった。

ある日、練習が終わった後に、部屋でみんなを着替えていると、キャプテンの隆弘が、

「なんかジュースとか欲しくないか？」

と言いつ出した。

「誰かコンビニに買出しに行くことにしようぜ」

「ジュース代はどうするんだよ」

「確か部費がまだ余ってるはずだよ」

じゃんけんの結果、僕と雄二が買い出しに行くことが決まった。部の会計係の辰也からお金を預かって、僕と雄二は部室を出た。

コンビニは、学校から五分くらいのところにある。二人で並んで歩きながら、僕たちは色んな話をした。

「この間の面談、どうだった？」

「ああ、南校はたぶん大丈夫だろうって言われた。雄二は？」

「俺も大丈夫だって」

「雄二は本当に南でいいのか？ もっと上に行けるんじゃないか？」

「先生にも言われたな、それ。いいんだよ。南が一番家から近いし、それに、サッカーも強いしな」

コンビニに着くと、僕たちは二リットルのペットボトルを五本まとめて買い物かごに入れた。ついでにスナック菓子も二、三個かごに放り込んで、レジに向かった。

雄二がお金を払っている間、僕はペットボトルとお菓子の入った袋を抱えて、先にコンビニを出た。もう日が暮れて、辺りは薄暗い。コンビニの入り口近くで、両親を待っているのか、兄妹らしい小さな男の子と女の子が遊んでいた。

コンビニのドアが開く音がして、僕は後ろを振り返った。見ると、雄二が僕と同じような袋を抱えて歩いてきた。と、次の瞬間。雄二の目が驚いたように見開かれた。

「…修平っ！」

突然、雄二は僕の名を叫んで、こちらに向かって走り出した。僕は、え、と声を漏らして、思わず振り返ろうとした。その途端、耳をつんざくようなブレーキ音が辺りに響き渡り、僕はものすごい力で突き飛ばされた。

何が起こったのか、分からない。そこらじゅうに散らばったスナック菓子の袋。ひしゃげたペットボトル。フロントガラスがクモの巣のようにひび割れた自動車。大声を上げて泣く子供たち。携帯電話でどこかへ早口で電話するコンビニの店員。そして。

僕は、コンクリートの地面にうずくまったままピクリとも動かない雄二を、ぼうぜん呆然と見つめていた。

雄二は、幸いにもけがは左腕の骨折だけですんだものの、大会には当然ドクターストップが出た。雄二が出場できなくなったことで、僕はレギュラーの座を獲得し、僕たちのチームは大会で勝ち進み、ついに念願の優勝を果たした…。

「…で、その過去をやり直したいんだ」

座り込んで僕の話聞いていた男の子の言葉に、僕はうなずいた。

「でもさ、レギュラーになって優勝したかったんじゃないの？ やり直しても、またできるとは限らないよ？」

「それは分かってるよ。確かに僕はレギュラーになりたかったし、優勝もしたかった。だけど…」

親友にけがをさせてまで、勝ちたかったわけじゃない。

「分かった。それじゃあ、時間を戻すよ」

そう言って、男の子はズボンのポケットから長い銀色の鎖のついた、立派な懐中時計を取り出した。そうして、僕の右手首に鎖を一回巻きつけると、「正確な日付は思い出せる？」

「…一年前の六月十日。間違いないよ」

男の子はふんふんとうなずきながら、懐中時計のねじを巻き始めた。

「ええっと、六月十日、六月十日…あれ？」

「どうしたの？」

「この過去…もう一度変更されてる」

男の子はそう言つて、僕の手首から鎖をはずした。

「ごめんね、お兄ちゃん。この過去は、変更できないや」

「えっ…どうして？」

男の子は懐中時計を元通りにポケットにしまうと、困ったように笑った。

「過去を変更するとね、少なからず、時間の流れがゆがんでしまうんだ。一度変更したときのゆがみぐらいだったら、ぼくのチカラで何とか治せるんだけど、一度変更してしまった過去をもう一度変更しようとする、一度目とは比べ物にならないくらい、大きなゆがみが出てしまうんだ。こればかりは、ぼくのチカラでもどうにもできない。それでも強引に変更しようとする、最悪、お兄ちゃんは時空に飲み込まれて、消えてしまう」

「消える…？」

「死ぬんじゃないんだよ、文字通り、消えるんだ。お兄ちゃんの周りの人たちから、お兄ちゃんに関する記憶は消えて、お兄ちゃんは、そもそも存在しなかったことになる。」

何も言えなくなった僕を尻目に、男の子は再び座り込んで何か考え込んでいた。しばらくすると、男の子はぱっと顔を上げて、僕と目を合わせた。「ああ、思い出したよ。本当はこういうことを言うのはいけないことなんだけど、この場合はしょうがないね」

男の子は、今までとは打って変わって、真剣な表情で僕を見た。

「お兄ちゃんのお友達の、雄二くん。この過去を変更したのは、雄二くんだよ」

男の子の言葉に、僕はあっけにと取られてしまった。どうして雄二が、そんなことを？



か分からず、おなかが痛いとうソをついて部活を休んだ。ところが、その日、雄二は僕の家に来て来た。

怒鳴られると思っていた。恨み言を言われると思っていた。だけど、雄二が僕の顔を見るなり言った言葉は、

「大丈夫か？」

雄二は、部活を休んだ僕を心配して来てくれたのだ。たまらなくなつて、僕はウソをついたことを話し、そして、事故のことを、両手について謝つた。すると、雄二はあわてたように手を振つて、

「何言つてんだよ、別に修平のせいじゃないだろう。俺が勝手に飛び出して、勝手にけがしただけなんだから、修平が気にすることはないよ」と言つた。そして、とびっきりの笑顔で僕の肩を叩いて、

「試合、頑張れよ。絶対優勝しなくちゃ、だめだからな」

そう言つて、僕の背中を押してくれた。

それを聞くと、男の子はふふふ、と笑つた。

「お兄ちゃんもね、病院にお見舞いに来た雄二くんに、同じことを言つたみたいだよ」

一ヶ月前に入学した高校で、雄二にしきりにサッカー部に誘われたけど、僕はどうしても入る気になれなかった。雄二にけがをさせてしまった僕が、雄二の近くでサッカーをしてはいけないように思えたのだ。

「雄二くんは、お兄ちゃんにサッカーをやめて欲しくなんかないと思うよ」

男の子はそう言つて立ち上がると、ぐっと背伸びをした。

「さあ、ぼくはそろそろ帰らなくちゃ。もう夜になつちゃうし」

辺りを見渡すと、もう夕陽は沈んで、白く光る月が顔を出していた。川の上流の方の空は、すでに群青色になつて、一つ二つ星が瞬いている。

「ぼくは、夕方にしかこの世界に出てくることができないんだ」

「夕方？」

僕が首をかしげると、男の子はまたふふふ、と笑って、

「夕方っていうのはね、一日の中で、一番あいまいな時間なんだ。昼にも、夜にも属さない、支配されることのない時間。だから一番出てきやすいんだ。言ったでしょ？ 夕陽ならいつも見てる、って」

男の子は、またあの懐中時計を取り出し、ねじを巻き始めた。そして、短針と長針を、十二時の位置で合わせた。その途端に、男の子の体を、まばゆいばかりの光が包み込む。男の子は、僕のほうを見ると、にっこりと笑った。

「じゃあね、お兄ちゃん。やり直したい過去ができれば、また会おうね」

そう言って、男の子―夕暮れの妖精は、一瞬大きな光に包まれたかと思うと、次の瞬間には、もう跡形もなく消えてしまっていた。

僕は、男の子が立っていた場所を見つめたまま、しばらくぼおっと色んなことを考えていたが、辺りがどんどん暗くなっていくのに気づいて、帰ろうと思い立ち上がった。

歩きながら、考える。今日、雄二の家に電話しよう。明日、入部届けを出しに行こう。

もう一度、雄二と一緒にサッカーをやろうと、僕は思った。